

パリ市歴史中心地区における都市組織の変遷に関する研究 — G I S（地理情報システム）を用いた地割の分析 —

A study on the transformation of the <tissu urbain> in the
historical district of Paris.

—An analysis of the parcel by means of GIS—

松 本 裕
Yutaka MATUMOTO

パリ市の歴史中心地区の一つに数えられる第Ⅱ区に属するボンフ・ヌーヴェル地区とマイユ地区を研究対象として取り上げ、両地区に関する 18 世紀初頭から今日に至る地籍図（cadastre）を主な一次資料として分析し、そこから両地区全域にわたる個々の地割を可能な限りすべて精確に割り出した。抽出された地割は、G I S（地理情報システム）を用いて地割組織図へと統合、復元図化（原図縮尺 1/2000）した。

本研究では、地割を基本要素とする都市組織（tissu urbain）の変遷に着目し、歴史的都市における空間構造の重層状態を解読することを主目的としている。

こうして復元された地割組織図を相互に比較してみると、両地区には、いくつかの都市組織の重層が見受けられる。とりわけ、もっとも明瞭に刻印されているのは、シャルル5世（Charles V）の城壁という都市境界の多大な影響化にあったことを示す痕跡である。シャルル5世の城壁の存在により、城壁解体跡地、外側、内側、とそれぞれの領域ごとに特徴的な都市組織の変遷が確認される。とりわけ城壁内側で、フィユ・ディユ修道院がフランス革命によって廃止され、パサージュ・デュ・ケール（passage du Caire）へと変貌を遂げたことは、当該地区のみならずパリ都市計画史上特筆すべき出来事であった。フランス革命によってフィユ・ディユ修道院の巨大な敷地も、土地の絶対所有という新しい土地所有形態を基本とする経済取引の場へと持ち込まれた結果、過密な都市においてヴォイドとしてその圧力に耐えてきた当修道院の敷地は、一気にかつ非常に高密度にロティスマン（lotissement：画地分譲）されたことが想像できる。こうした変化は、パリのみならず人口超過の大都市においてはしばしば見られる現象である。つまり稠密な都市において、大きな街区が細かな街路の開設によって分割され、それによって接道面積を増加させることで過密な都市内に新しい地割りの可能性を効率よく見出していくのである。こう考えれば、パサージュ・デュ・ケールの新規性はガラス屋根に覆われた新しい街路空間の登場以上に、新しい都市化のシステムとしてこそ見いだされるべきであろう。このような地割組織に、オスマンによる改造事業が重ね合わされ、ほぼ今日のパリの空間構造が完成する。フィユ・ディユ修道院からパサージュ・デュ・ケールへの変化が、土地区画組織の観点から見れば、稠密な都市における大きな街区のパサージュによる細分化であるとしたら、オスマンによる大改造は細かな街区の大通りによる吸収合併である。こうした一見相反する地割組織の再編成はともに、その時代の要請に応えるべき都市化のシステムであり、その重層がパリの都市空間を特徴付けている。